

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2023年4月21日

X君への手紙

10年ほど前、中学3年の学年主任をしていたとき、学年通信に「X君への手紙」という文章を書きました。これは、夏休みの宿題で、課題図書『社会とどう関わるか』山脇直司（岩波ジュニア新書）を読んだある生徒が読書ノートに感想を書いてきて、筆者がそれに応える形で自分なりの考えを綴ったものです。先日、パソコンを整理しようとしてあれこれ古いファイルを開いていて見つけました。当時中学3年生のその生徒（X君とします）が拙（つたな）い文章で書いてきた感想は以下のとおりです。

「僕は今、もう子供でもなく、そして大人でもない。とても微妙な立場にいると思う。子供でもないから、ただ遊んでいるわけにもいかない。しかし、大人でもないのだから、“社会”がどんなものかもわからない。どうしてよいかわからずとても不安です。小さいころ思ったのは“バカ”ではいたくない、バカだとこの現代では生きられないということです。でも現代では頭がよくても仕事に就けないこともあるらしく、とても不安です。」

ちなみに、10年前にこの感想を読んだ筆者は、「不安はあってあたりまえ。その不安から逃げず、ひとつひとつ乗り越えていくことで人は成長するのだ」「知識と知性をバランスよく身につけよう。それが社会が求める“頭のよい人”です」みたいなことを書いていました。うーむ、ちょっと説教臭くないか？

改めて自分の文章を読み返してみて、今ならX君にもう少し違う言葉をかけることができるのではないかと思いました。そこで新たにX君への手紙を、新年度最初の「校長室だより」として書いてみることにしました。

☆ ☆

X君へ。君の文章を読ませてもらいました。読んでいて、40数年前、自分が茨城県北部の片田舎の中学3年生だったころ、日々感じていた将来への不安がリアルによみがえってきました。高校受験を前にして、自分は希望する高校に進学できるのだろうか、自分は今からどんな人生を歩むことになるのだろうか、と不安でなりません。そのくせ、こんな道に進みたいというような積極的な目標はなく、身を入れて受験勉強に励むわけでもなく、じわじわと時間だけが過ぎていく中で空虚な焦りを感じていたと記憶しています。

今、君が感じている不安は、おそらく君や僕だけでなく、君のお父さんもお母さんも、おじいさんもおばあさんも、十代を過ごしたすべての人が経験する不安です。私たちが不

安を感じる時、その対象にあるものはなんでしょう。僕はそれを「未知」だと考えます。志望校に合格できるか、希望する職業に就くことはできるか、将来自立して生きていけるか、十代の君にとってはすべてが未知で、将来にどのようなできごとが待っているかは誰にも分かりません。しかも十代は生まれて初めて人生に関わる大きな選択を経験する時期です。今君が感じている不安は、避けては通れない、受け入れる以外にないものではないでしょうか。

君は、「大人ではないのだから“社会”がどんなものかわからない」と書いていますね。そのことばは、半分は当たっていて半分は間違っています。なぜなら、大人だって「社会」がどんなものか分かっているとは限らないからです。自分を例にあげて言えば、僕は今日まで30数年間、学校という場所で、教師として、教育に携わって生きてきました。だから、自分の通ってきた道のりを社会と呼ぶなら、分かっていることも多いし、ある程度説明もできます。しかし、金融や流通、土木や情報、医療や芸術など、他の分野の社会がどんなものなのかは、せいぜい話に聞いたり、文章で読んだりしたレベルでしか分からない。逆に、他分野の人の、教育という社会についての理解度も同じようなものでしょう。

要するに僕が言いたいのは、どこかに「これが“社会”です」という模範解答があるのではなく、その人が他者との関係の中で過ごした時間や経験が、その人にとっての「社会」を築いていくのだ、ということです。社会を知るためには、見知らぬ他者たちの中に飛び込んで、自分自身で何事かを経験していくしかないのです。

また君は、「“バカ”ではいたくない」とも言っています。そりゃ誰だって、自分がバカなよりは、バカじゃない方がうれしいに決まっている。でも、ちょっと考えてみてください。君の言う“バカじゃない”とはどういうことだろう？「バカじゃない、頭の良い人の定義って何？」という質問に君はどう答えるのでしょうか。

予想される一つは、「知識が豊富でなんでもよく知っている人」という答え。知識が豊富な人、とって真っ先に自分の頭に浮かんでくるのは、テレビのクイズ番組で「クイズ王」と呼ばれる人たちです。確かに、教科書にも出てこない歴史上の人物や、聞いたことも無い天体の名称をズバズバ答えてクイズに正解する様子を観ていると「すげえなあ〜」と驚きはします。しかしそれを「頭がいい」ことの定義としてよいのでしょうか。知識のインプットに関しては、どんなに人間ががんばってもコンピューターにはかないません。知識が必要なときはPCやスマホを起動させれば事足ります。身も蓋（ふた）もない言い方ですが、記憶力の限界まであらゆる知識をつめこんだクイズ王も、スマホを持った中学生に勝てる保証はないのです。

予想されるもう一つの答えは「理解力が高く、複雑な問題を素早く解く能力がある人」のようなもの。難解な数学の問題をどこから解いていいのかわからずにウンウンうなっている隣で、友人が涼しい顔でスラスラと正解していたら、「あいつ、頭いいな〜」と思うでしょう。その気持ちは痛いほど分かります。しかし、数学と違って、現実には君が生きる世界の中で出会う問題の多くには「正解」がありません。正解のない問いを前にして、大

切なのは「理解のはやさ」ではなく「理解の深さ」です。

かつて日本の原子力発電は安全神話に守られていました。多くの技術者や研究者がさまざまな方向から二重三重の検証を行い、日本では原子力事故は起こりえないとされていました。しかし、東日本大震災により発生した巨大津波は技術者たちの想定を上回り、福島第一原発事故が起こってしまいます。結果論にはなってしまいますが、原子力の安全性に対する理解の深さが足りなかったのです。

それでは、いったい「頭の良さ」とは何なのか？僕はそれを教養だと思っています。誤解の無いように先回りして言うておきますが、僕の言う教養は、「社会人として最低これだけは知っておきたい一般教養」の教養ではありません。教養について言葉で説明しようとするとなかなか難しいのですが、特定の目的のためではなく積み重ねられた知識やスキル、物事に対する深い理解や思考の源となり、その人の価値観や世界観を形成する土台となる知見、とでもいえるでしょうか。かっこよくいえばリベラルアーツです。

僕たちの生きる世界はさまざまな問いにあふれています。しかも、そのほとんどに正解はありません。しかし、時に僕たちは、そんな問いに対峙（たいじ）して答えを出さなければならない局面を迎えます。それは、ちょっとやそつとでできることではありません。日本のエネルギーは原子力に頼るべきなのか再生可能エネルギーへの転換をはかるべきなのか、気候変動に対処するには経済成長を抑制すべきなのか経済と環境の両立は可能なのか、緊張を増す近隣諸国との関係をめぐっては防衛力を増強すべきなのか対話による外交を重視すべきなのか、答えのない問いに答えを見いだそうとすると、全身全霊で問いを受け止め、考え抜くことが求められます。

全身全霊の思考を経て自分なりの正解を導き出そうとすると、その思考のプロセスを支えてくれるのが「教養」です。孔子の「思いて学ばざればすなわち殆し（あやうし）」を引用するまでもなく、知的バックボーンを持たない思想は、実に簡単に偏見や独善におちいります。太平洋戦争の歴史や、アメリカのイラク戦争での事実を知らずに、平和について論じようとするようなものです。

もちろん、悩んだ末に出した君の答えが、その後、新たな知見を得て覆（くつがえ）ることだってありえます。君が出した答えは、あくまで「現時点での君」の正解に過ぎません。現時点での自分の答えを絶対とせず、新たな知見を学び続け、生涯を通じて自分を更新し続けることができる人、それが教養のある頭の良い人といえるのだと僕は思います。

教養は、いつ、どこで、どんなふう作用し、何が何とつながり、何を生み出すことになるのか、はっきりとはわかりません。君の価値観や世界観を形づくっているその土台にどんな学びが存在しているのか、君自身も気づいていないかもしれません。

だから、もしも君が「“バカ”ではいたくない」と本気で思うなら、学ぶことに貪欲であるべきです。学び続け、新たな自分を更新し続けるべきです。そして、その知識が役に立つか立たないかを、未熟な現時点の自分の判断に委（ゆだ）ねるべきではありません。一生訪れることのない遠い国の産業も、複雑な数学の公式の証明も、はるかかなたの銀河の成り立ちも、遠い昔に詩人が残した一片のことばも、どこか見えないところで君を支える豊かな教養につながっているかもしれないからです。

長い手紙になってしまいました。まとめます。君が今感じている不安は、受け入れるしかありません。その上で、その不安を少しでも解消したいなら、見知らぬ他者の中に飛び込み、食欲に学び続けるしかありません。でも、分かります。それができるかどうか自信がないから不安なのですよ？

小さな安心材料を示しましょう。今、君のまわりで生活している大人、両親や教師（もちろん僕も含んでもらって結構です）、近所のおじさんや、よく行くコンビニのおばさんを見てください。君から見れば、生まれた時から大人だったように見えるかもしれませんが、皆、君と同じ十代の時期があって、君と同じ不安を抱え、しかし今、自立した大人として社会の中で生きています。こんなにもたくさんの大人が、十代の不安を乗り越えて今を過ごしている。それが君にできないわけはありません。

ただし、全国のおじさん、おばさんの名誉のために一言だけ付け加えさせてください。彼らは今までボーっと生きてきて、気づいたら自立した大人になっていたわけではありません。誰もが皆、人生のどこかで困難と向き合い、ちょっとだけがんばった経験があるのです。

君が、それでも信用ならないというなら、数万冊の本を読み、生物学、環境、医療、政治、経済、宇宙、哲学、臨死体験など多岐にわたるテーマで膨大な著作をなし、「知の巨人」と呼ばれ、2021年に亡くなった立花隆氏の言葉を紹介します。知の巨人の言葉なら、僕の説明なんかより100倍くらい信憑性（しんぴようせい）があるはずです。

「ある意志を持って、『本当にやるぞ』と行って途中までやれば、誰か助ける人が出てきたりするんです。人の共感を得れば、それが本当に実現しちゃうことがある。それがこの世の面白いところだと思います」（『立花隆 最後に語り伝えたいこと』中央公論新社）

がんばればどんな夢もかなう、君には無限の可能性がある、・・・なんて陳腐（ちんぷ）なウソは言いません。でも一つだけ、確信をもって君に伝えられることがあります。それは、学びは君が自由に生きられる世界の面積を広げてくれる、ということです。

君の人生をどう生きるか、それを決められるのは君自身しかいません。自分を信じてがんばれ。

今、この文章を読んでくれているすべてのX君へ。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。